

社会科・地歴科指導法における博物館、郷土資料館等を活用した授業力を身に付けさせるための方策について

— 千葉県教育振興財団が発掘した埋蔵文化財等の活用や県内博物館等との連携を中心として —

中村 敏行

The measures to acquire teaching skills using museums, local museums, etc. in Teaching Methods in Social Studies and Geography

— Focusing on the use of buried cultural properties excavated by The Chiba Prefectural Education Promotion Foundation and cooperation with the museums in Chiba prefecture —

NAKAMURA Toshiyuki

要約

中学校学習指導要領社会では、身近な地域の歴史を学ぶ際に「地域に残る文化財や諸資料を活用して身近な地域の歴史を多面的・多角的に考察し、表現する」学習を行うこととし、そのための手立てとして「博物館、郷土資料館などの地域の施設の活用や地域の人々の協力も考慮すること」を示している。

県内には地域の歴史そのものともいえる埋蔵文化財が数多く存在し、それらを展示する博物館や郷土資料館等も整備されている。しかしながら、中学校現場においては、いわゆる「博学連携の学習活動」は必ずしも活発化していない現状にある。その理由の一つに、大学等の教職課程において博物館等の活用方法について学ぶ機会があまりなく、指導スキルが身に付いていないという指導者側の問題が考えられる。

本論考では、こうした状況に鑑み、千葉県教育振興財団が行っている埋蔵文化財の発掘調査の状況を明らかにした上で、同財団が普及活動として行っている「出土遺物公開事業」等を教職課程の「社会科・地歴科指導法」の中に取り入れ、社会科教員を目指す学生に「博学連携」の実施方法や留意点などの指導スキルを身に付けさせる方法を論述した。

キーワード：千葉県内の埋蔵文化財、埋蔵文化財等の保存と活用、

博物館等との連携のための指導スキルの習得、博学連携とアクティブ・ラーニング

はじめに

現在、筆者は「公益財団法人 千葉県教育振興財団」（以下教育振興財団という）に理事長として勤務しながら、縁あって敬愛大学において非常勤講師として教員養成に携わっている。

本論考では、教育振興財団が行っている埋蔵文

化財の発掘調査事業及び調査により出土した遺物を本学の教職課程で開設している「社会科・地歴科指導法」において有効活用していくための一方策について論述することとしたい。

また、本論考を進めるに当たって、教育振興財団の組織や業務内容等が一般に広く周知されているという状況ではないことから、広報の意

味も込めて、教育振興財団の概要や直近の発掘調査の状況、普及活動等について述べることにしたい。

1. 教育振興財団について

(1) 教育振興財団の設立目的

教育振興財団は、「千葉県における教育・文化及びスポーツの振興を図ることにより、県民の生涯をととした学習活動等への参加を促進し、健やかで心ゆたかな県民生活の実現に寄与する⁽¹⁾」ことを目的として設立された団体である。

(2) 教育振興財団の主な事業

教育振興財団の主な事業は、以下の5点に大別することができる。

- 1 社会教育の推進
- 2 学校教育の支援
- 3 スポーツの振興
- 4 文化財の調査研究と遺跡等発掘調査の受託事業
- 5 千葉県から受託する事業及び施設の管理

この5点のうち、主たる事業は4の文化財の調査研究と遺跡等発掘調査の受託事業である。

この事業について若干説明を加える。

文化財保護法では、「周知の埋蔵文化財包蔵地」において土木工事などの開発事業を行う場合には、都道府県・政令指定都市等の教育委員会に事前の届出等を行うよう定めている¹⁾。

この規定により、開発業者等から土木工事等の開発事業の届出等があった場合、都道府県・政令指定都市等の教育委員会はその取り扱い方法について協議し、その結果、やむをえず遺跡を現状のまま保存できない場合には事前に発掘調査を行って遺跡の記録を残し（記録保存）、その経費については開発事業者に協力を求めている。

文化財保護法第2条では、文化財について幾つかの定義を行っている。関係する記述を抜粋すると「貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの」が文化財に当たると定義されている。

なお、同法第92条では、文化財のうち、土地に

埋蔵されている文化財について、「埋蔵文化財」と呼称するとしている。

また、「周知の埋蔵文化財包蔵地」とは、「埋蔵文化財の存在が知られている土地」のことで、全国で約46万カ所あり、毎年9千件程度の発掘調査が行われている²⁾。

こうした埋蔵文化財は、記録では知ることのできない国や地域の豊かな歴史と文化をいきいきと物語るものである。したがって、これらは個性豊かな地域の歴史的・文化的環境を形づくる重要な素材・資産であり、国民共有の貴重な財産であるとともに、これらをととして国や地域に対する誇りと愛着をもたらす精神的な拠り所となる。

教育振興財団では、1974年（昭和49年）の設立以来、この文化財保護法に基づく埋蔵文化財の調査研究及び発掘調査を行うことで千葉県における文化財保護行政の一翼を担ってきた。

(3) 教育振興財団の沿革

昭和49年11月1日

(財)千葉県文化財センターとして、千葉県教育委員会より設立許可

平成2年6月19日

主たる事業所を現在地、四街道市鹿渡809-2に移転する（現在地）。

平成17年9月1日

名称を（財）千葉県教育振興財団に変更する。

平成18年4月1日

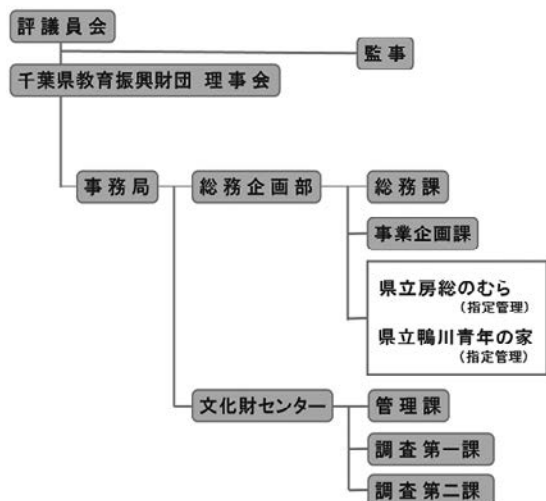
千葉県立房総のむらの指定管理者となる（現在4期目）。

平成20年4月1日

千葉県立鴨川青年の家の指定管理者となる（現在4期目）。

平成24年4月1日 公益財団法人に移行

(4) 教育振興財団の組織



(5) 教育振興財団における埋蔵文化財の調査研究及び発掘調査の実績(令和3年度)

○令和3年度首都圏中央連絡自動車道路(大栄～横芝)埋蔵文化財発掘調査業務・道路建設事業

- ①委託者 東日本高速道路株式会社
- ②遺 跡 木戸台遺跡ほか16カ所
- ③所在地 横芝光町、芝山町、多古町周辺
- ④面 積 93,966㎡
- ⑥成 果 九十九里地域では希少な縄文時代中期の大集落、古墳時代後期の大型堅穴住居跡を複数軒検出した。

○更なる機能強化整備に係る埋蔵文化財調査(2021)・空港建設事業

- ①委託者 成田国際空港株式会社
- ②遺 跡 山木遺跡ほか32カ所
- ③所在地 芝山町、成田市、多古町辺
- ④面 積 447,713㎡
- ⑤成 果 古墳時代後期を中心とした大規模な集落跡を検出した。

○平成29年度東京外かく環状道路(市川区間)埋蔵文化財調査・道路建設事業

- ①委託者 東日本高速道路株式会社
- ②遺 跡 北下遺跡
- ③所在地 市川市
- ④面 積 271㎡
- ⑤成 果 中・近世土器・陶器などを検出した。

【県内発掘調査の状況】(参考)



2. 文化財の保存と活用について

(1) 「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会」について

埋蔵文化財は、国や地域の歴史と文化の成り立ちを明らかにするうえで欠くことのできない国民の共有財産である。国や地方公共団には、それを適切に保護し、開発事業との円滑な調整を図っていくことが求められる。

そこで文化庁は、埋蔵文化財保護行政を進める上で必要とされる事項に関する基本的な方向を検討することを目的として、平成6年10月に「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会」を設置した。

この委員会では、これまで、埋蔵文化財保護行政の諸課題として重要な事項について検討し、埋蔵文化財の保護の必要性及び教育的資産としての意義等について以下のように報告・提言している⁽²⁾。

(2) 文化財保護の必要性

日本では、昭和30年代以降、経済的な発展と社会的基盤の整備が進められ、人々の暮らしが豊かになった反面、国土や自然環境は大きく変貌した。こうしたなか、人々は失ったものを取り戻そう

と心の豊かさや潤いのある暮らしを求め、生涯にわたる学習意欲を高め、自然や歴史・文化を大切に、環境に配慮した生活空間を希求するようになってきている。

このような社会的要請に応える上で、地域の歴史や文化を具体的に語りかける遺跡をはじめとする各種の文化財が果たす意義はきわめて大きい。

また、現在、市町村合併等により地域の再編が進んでいる。遺跡や文化財を有効な素材として活用することは、各地方公共団体にとって必要なアイデンティティを確認し、新たなシンボルを形成していくうえで、重要な施策となる。

埋蔵文化財は、こうした社会からの要請、行政的な必要に応じていくことができる恰好の素材であり、埋蔵文化財行政はそれに対応することが求められている。

（３）教育的資産としての意義

土の中から掘り出される遺構・遺物は、先人が実際に創りあげ、かつ使ったもののそのものである。住民にとって、それらに直に触れることは自分たちの祖先と時代を超えて直接対話することであり、国や地域の歴史や文化に対するあこがれや知的好奇心を刺激するものである。そのため、埋蔵文化財は親しみやすい教材として、学校教育における社会科や歴史の学習に役立たせることができる。

また、埋蔵文化財を通して、現在の生活の礎を築いた祖先に対する畏敬の念を育み、生きる知恵や力、あるいは自然との共生や生命への尊厳等の心を学ぶこともでき、今日の社会問題を見つめ直す教材として学校教育における諸活動、さらには生涯学習で活用することもできる。

このほか、埋蔵文化財を活用した体験学習等の諸事業は、地域や世代や様々な立場を超えた多くの人々が交流する機会となり、埋蔵文化財に直接触れる機会は、障害者や高齢者の社会参加の場を提供することにもなる。

（４）教育振興財団等が行う普及事業について

教育振興財団では、これらの提言を踏まえ、特に埋蔵文化財が教育的資産として大きな可能性を秘めていることに着目し、以下のような普及事業を実施している。

①出土遺物公開事業

この事業は、出土品の有効活用及び県民の埋蔵文化財への理解促進と文化財保護思想の普及を目的して実施している。

令和３年度は、「らくがく縄文館―縄文土器のマナビを楽しむ―」と題し、県内３会場で、一般の人々が楽しく「縄文土器」を学ぶことができるように、県内を中心とした出土資料と解説パネル等により、わかりやすく展示した。あわせて関連事業として、展示解説会、ワークショップ、講座、講演会を開催した。

○出土遺物の展示会

市川市立市川歴史博物館

令和３年７月24日（土）～同年９月12日（日）

44日間 入場者 2,686名

八千代市立郷土博物館

令和３年10月16日（土）～同年12月５日（日）

42日間 入場者 2,558名

袖ヶ浦市郷土博物館

令和４年１月15日（土）～同年２月27日（日）

37日間 入場者 3,214名

【展覧会入場者総数 8,458名】

○出土遺物の展示解説会

市川市立市川歴史博物館

令和３年７月31日（土）・８月14日（土）・

９月４日（土）参加者数 37名

八千代市立郷土博物館

令和３年10月23日（土）・11月６日（土）・

11月27日（土）参加者数 57名

袖ヶ浦市郷土博物館

令和４年１月16日（日）・２月19日（土）

参加者数 35名

【展示解説会参加者総数 129名】

○ワークショップ（ペーパークラフト）

市川市立市川歴史博物館

令和３年８月８日（日）・８月21日（土）

参加者数 20名

八千代市立郷土博物館

令和３年10月30日（土）・11月13日（土）

参加者数 33名

【柏市大松遺跡の大型深鉢形土器】（参考）

令和3年度の出土遺物公開事業の中核として展示した縄文式土器



この土器は口径約55cm、高さ約64cmを測る大型土器である。土器の口縁から胴部まで、凸文様である隆起線で三角形に区画し、その内部には凹文様である沈線で描く渦巻きや三角形の沈刻が配置されて、全体の凸凹文様のコラボレーションが見事である。文様の特徴と器形から、約5,000年前の縄文時代中期中頃に、西関東の土器と東関東の土器がここ柏の地で融合したことがわかる。

この土器はムラの中央広場を取り囲む貯蔵穴の一つから出土した。以下の写真に示すように貯蔵穴の天井にひっかけて、壁寄りに直立した状態で発見された。このような出土例はたいへん珍しいものなので、あえて本稿で紹介することとした。

②遺跡見学会

この事業は、発掘作業及び整理作業の成果を広く一般県民や児童・生徒に公開して、埋蔵文化財への理解と関心を高めることなどを目的として実施している。令和2年度以降はコロナウイルス感染症の拡大により実施を見合わせていたため、再開を求める考古学ファンが多かった。

令和4年度は以下のとおり実施し、当日は天候にも恵まれ多くの見学者で賑わった。

場 所 横芝光町木戸台遺跡

日 時 令和4年10月29日（土）

参加者 87名

【横芝光町木戸台遺跡について】

この横芝光町木戸台遺跡は、九十九里平野を横断して太平洋に注ぐ栗山川と、その支流である高谷川右岸の標高38m前後の台地上にあり、首都圏中央連絡自動車道（圏央道）大栄－横芝区間の建設に伴って、平成29年度から発掘調査を行っている。

昨年度までに5地点の調査を行った結果、縄文時代中期中頃～後半（約5千年前）の竪穴式住居跡約50軒、貯蔵等に利用された土坑（貯蔵穴と推定されるもの）1,000基以上、土抗墓1基、古墳時代後期の竪穴式住居跡約50軒などの遺構や貝塚が見つかり、土器、石器などの遺物や人骨、自然遺物なども多数出土している。

眼下の栗山川流域では、縄文時代の丸木舟が数多く発見されるなど、地域の縄文時代の大規模集落跡として注目されている。

今回公開した第6次調査地点では、縄文時代中期の貝層を伴う土坑や古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡が検出されている。

【栗山川流域の低地で出土した丸木舟】（参考）



※土器等の写真は教育振興財団より提供

③「土器ッと古代“宅配便”」事業

この事業は過去に教育振興財団で実施していたが、現在は千葉県教育委員会教育振興部文化財課の主催事業として行われている。

この事業では、授業に役立つ実物資料（縄文式土器など）を用いた出前授業や、貸出学習キット、体験学習キットの無償での貸し出しなどを行っている。具体的な実施内容³⁾は以下のとおりである。

○展示遺物解説

貸出資料を展示して土器や石器などの資料を解説し実物資料から原始・古代の生活を学ぶ。

○火起こし体験

原始時代の火起こしの道具を使って、火起こしをする。

○勾玉作り

加工のしやすい滑石を使って、砥石や紙やすりで勾玉を作成する。

県教育委員会は、出土遺物を大量に保管し、直に手に触れる環境も整え易い。展示を前提としている博物館にはない、機動力を発揮して学習者の手元に実物を届けることができる点が大きな利点である。子供たちは教材レプリカに触れたことはあっても、本物の土器に触れる経験はほとんどない。本物をどんどん触らせ、その迫力や質感を感じることで感性を刺激することをねらいとするものである。

3. 学習指導要領等との関わり

（1）歴史的分野の目標との関連から

中学校学習指導要領社会⁽³⁾（平成29年告示）（以下、「学習指導要領」）では、歴史的分野の目標のうち、柱書と呼ばれる部分は以下のとおりとなっている。

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会科編⁽⁴⁾（以下、「解説」）によると柱書中の「社会的事象の歴史的な見方・考え方」については、「社会的事象を時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付けること」とし考察、構想する際の「視点や方法（考え方）」として整理したとしている。

佐倉市にある国立歴史民俗博物館では、博物館学習の学習効果⁽⁵⁾を下記のとおり3点示している。

○歴史に関する当事者意識

実物資料を通して、歴史の臨場感を伴った当事者意識に基づく学習ができる。

○歴史認識の深まり

展示資料相互の因果関係や変遷を考えることにより生まれる歴史認識が育成される。

○情報活用能力の育成

博物館の多様な情報源から情報を選択し、活用することを通して育成される。

要約すると、博物館学習は「実物資料（多様な情報源）を使い（選択し）歴史の因果関係や変遷を考える力を育成する」ことに効果的であるとされており、これは歴史的分野の目標の柱書に掲げる「社会的事象の歴史的な見方・考え方」の育成と合致するものであるとしているのである。

また、「学習指導要領」では、歴史的分野の目標（3）において、以下のとおり文化遺産を尊重しようとするものの大切さについて触れている。

歴史に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の歴史に対する愛情、国民としての自覚、国家及び社会並びに文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を尊重しようとするものの大切さについての自覚などを深め、国際協調の精神を養う。

「解説」によると、歴史的分野の目標（3）に示す「我が国の歴史に対する愛情、国民としての自覚、国家及び社会並びに文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる

文化遺産を尊重しようとすることの大切さについての自覚などを深め、国際協調の精神を養う」とは、歴史的分野の学習を通じて、教育基本法（教育の目標）第二条五に示される「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」の精神を実現することを意味すると記述されている。

つまり、歴史学習をととして文化遺産（埋蔵文化財を含む）を尊重し、保護していくことの大切さを自覚させることは、日本人としてのアイデンティティを確立させ、国際協調の精神を身に付けさせることにも寄与する重要な事項とされているのである。

（２）内容の取扱い・「A 歴史との対話」との関わりから

文化財の活用について、「学習指導要領」では、内容の大項目「A 歴史との対話」の中で触れている。この大項目は、歴史的分野の学習の導入として、歴史的分野の学習に必要とされる基本的な「知識及び技能」を身に付け、生徒が、過去を継承しつつ、現在に生きる自身の視点から歴史に問いかけ、歴史的分野の学習を通して、主体的に調べ分かつようとして課題を意欲的に追究する態度を養うことをねらいとしている。

内容の「A 歴史との対話」は、「（１）私たちと歴史」及び「（２）身近な地域の歴史」の二つの中項目から構成されており、「（２）身近な地域の歴史」では、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導することとしている。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

（ア）自らが生活する地域や受け継がれてきた伝統や文化への関心をもって、具体的な事柄との関わりの中で、地域の歴史について調べたり、収集した情報を年表などにまとめたりするなどの技能を身に付けること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

（ア）比較や関連、時代的な背景や地域的な

環境、歴史と私たちとのつながりなどに着目して、地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現すること。

また、「解説」では、博物館、資料館の活用について「（２）身近な地域の歴史」の内容の取扱いの中で以下のように記述している。

（２）については、内容のB以下の学習と関わらせて計画的に実施し、地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに、人々の生活や生活に根ざした伝統や文化に着目した取扱いを工夫すること。その際、博物館、郷土資料館などの地域の施設の活用や地域の人々の協力も考慮すること。

要約すると、身近な地域の歴史を学習する際には、「比較や関連、時代的な背景や地域的な環境、歴史と私たちとのつながり」などに着目して、「地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現する」学習を、内容の「B 近世までの日本とアジア」以下と関わらせて行うよう求めているのである。

これは、前学習指導要領（平成20年告示）⁴⁾で示されていた「身近な地域の歴史を調べる活動」の趣旨を受け継ぎ、それが一層着実に実施されることを重視したものであるといえる。

なお、「解説」において「身近な地域」とは、生徒の居住地域や学校の所在地域を中心に、生徒自身による調べる活動が可能な、生徒にとって身近に感じることができる範囲であるが、それぞれの地域の歴史的な特性に応じて、より広い範囲を含む場合もあるとされている。

「身近な地域」は、歴史上の出来事を具体的な事物や情報を通して理解することができるとともに、それを自らが生活する日常の空間的な広がりの中で実感的に捉えることができる学習の場である。

県内には、埋蔵文化財を含め多くの文化財等が存在しており、地域の歴史を語り継ぐ財産として大切に保存されている。また、各市町村立学校の周辺地域には、こうした文化財を展示する博物

館、郷土資料館等が数多く設置されており、教育的資源として活用しやすい立地となっている。

正に本県は、「学習指導要領」が示す「地域に残る文化財や、地域の発展に尽くした人物の業績とそれに関わる出来事を取り上げ、地図を用いて空間的な認識を養いながら、博物館、郷土資料館などの地域の施設の活用や地域の人々の協力も考慮して、身近な地域における具体的な歴史に関わる事象からその時代の様子を考察できるようにする学習」が行いやすい環境下にあると考えられるのである。

(3) アクティブ・ラーニングとの関わりから

「博学連携」について学習指導要領との関連は前述したとおりであるが、アクティブ・ラーニングの視点からもう少し論述したい。

この論考を執筆するに当たり、幾つかの示唆をいただくために酒々井町教育委員会の教育ファシリテーターを務める一場郁夫氏を訪ねた。

一場氏は、元小学校教員で県立中央博物館や国立歴史民俗博物館に勤務した経験を有し、長く「博学連携」の研究を進めてきた方である。

同氏はその著書⁽⁶⁾の中で、アクティブ・ラーニングを進める上で博物館等を活用した学習が効果的であるとして、次のように述べている。

○主体的な学び

- ・学習課題を解決するために関係する展示資料を進んで見つける。

○対話的な学び

- ・学芸員に調査内容や展示資料に関する質問をし、質問に対する説明や展示解説を聞き理解を深め、友だちに分かりやすく伝える。

○深い学び

- ・博物館での調査内容を発表し合い、新しい知識や技能を習得する。

また、指導者に対しては博物館学習を進める上での視点を次のように示している。

○博物館の展示資料が学習指導要領のねらいに即して教科書の内容と結びつくように子どもの興味関心と問題意識を喚起する素材（資料）を選定する。

→子どもの疑問から設定された学習問題を解決するための予想が、博物館での学習課題となる。

○問題解決的な学習においては、課題（予想）を解決するために証拠（証拠となる資料）を探すことが基本となる。

→博物館の展示資料は課題解決のための証拠である（博物館学習は証拠探し）。

○指導者には、生徒が自分の課題（予想）を証明する展示資料を探すという視点（目的意識）に基づいた調査活動を導入したプログラムの構成が求められる。

4. 出土遺物公開事業や博物館等を活用した「社会科・地歴科指導法」の改善方策について

(1) 中学校社会科において、地域に残る文化財や博物館、郷土資料館など学校外の施設を活用した授業実践が少ない理由

これまで博物館等を活用した学習の重要性について論述してきたが、中学校現場の状況に目を向けると社会科授業の中でこのような学習が実践されている例はかなり少ない。何故なのか、以下で整理したい。

①時間的な制約

授業で地域に残る文化財や博物館等を活用する場合、展示物などの資料にどのようなものがあり、それが教科書の中でどのように扱われ、実際の学習にどのように関連性をもたせるのか事前に計画しておく必要があり、市町村の学芸員との打ち合わせや博物館等の下見などに多くの時間を要するため、現場教員から敬遠されがちである。

②指導スキルの問題

指導者側に地域に残る文化財や博物館等の活用について指導スキルが身に付いていない。教員養成課程で十分学んでいない。例えば、事前事後の指導、既習事項との関連性など授業において教員が意識すべき事項がよく理解されたおらず、活用が必ずしも効果的な学習につながっていない。

③地域的な課題

「身近な地域に活用できるものがない。」現場の教員からは、このような声を聞くことがある。確

かに市町村によっては郷土資料館等が設置されていないこともある。しかし、県内には多くの文化財が存在しており、それらを収蔵した郷土資料館等が多数設置されている。また、教育庁教育振興部文化財課や教育振興財団においても様々な普及事業を行っている。国立や県立の博物館もある。残念ながら、現場教員に対する広報活動が不足していることは否めないが活用する施設にはことかかないと考えている。

（２）「社会科・地歴科指導法」への導入の意義

「出土遺物公開事業」は、先に述べたとおり、「出土品の有効活用及び県民の埋蔵文化財への理解促進と文化財保護思想の普及を目的とする」事業であり、毎年度、県内３会場程度（県内市町村の所有する郷土資料館等）を巡回し実施している。今年度は「柏市郷土資料展示室」、「船橋市飛ノ台史跡公園博物館」、「千葉県中央博物館」を巡回して実施することとなっている。

今回の論考では、特に教育振興財団との協力・連携により「出土遺物公開事業」の活用に焦点を当てているが、それ以外にも県内には多くの県立や市町村立の博物館・資料館等が設置され、地域の歴史・文化・民族等に関わる資料に触れる機会を保证する重要な教育施設となっている。

さらに、佐倉市には多くの小中学校が校外学習等で利用する施設として国立歴史民族博物館もある。このように千葉県の状況は極めて「博学連携」に適していると考えられる。

このような県内の状況から千葉県の社会科教員を目指す学生が、教員養成課程において博物館等を活用した社会科授業の進め方を学ぶことは大変有意義なことであると考えている。

具体的な効果としては、以下のとおりである。

①埋蔵文化財に対する正しい理解が身に付く。

文化財専門職員の講話や実物に触れる体験学習などをおして、埋蔵文化財が、国や地域の歴史と文化の成り立ちを明らかにするうえで欠くことのできない国民の共有財産であることなど埋蔵文化財に対する知識理解を深めることができる。

②社会科授業に有益な情報を得ることができる。

将来、社会科教員となり、授業を行うに当たっ

て教育振興財団などが実施している様々な普及事業（例えば出土遺物公開事業や土器ッと古代“宅配便”など）を「社会科・地歴科指導法」の中で、自らが体験することで実施内容について理解が深まり、授業での円滑な活用が期待できる。

③指導スキルの向上が期待できる。

博物館等を活用した社会科授業の改善が進まない大きな課題の一つとされている指導者側の指導スキルの向上が期待できる。

（３）令和３年度教職実践演習での試み

ここまで縷々述べてきたことを踏まえ、教育振興財団等が実施している普及活動を教職課程の「社会科・地歴科指導法」に導入すべく、令和３年度に筆者が担当した「教職実践演習」の中で試みとして実施したので、その際の実践報告を行うこととする。

なお、この事業を担当している県教育庁文化財課の職員は本学の卒業生で、今回の試みにご協力をいただいたことを感謝と共に申し添えたい。

①実施日時 令和３年12月16日・木曜日・５限目

②実施内容 「土器ッと古代“宅配便”」の出前授業
縄文式土器についての講話
勾玉作り実習及び火起こし体験

③講師 千葉県教育庁教育振興部文化財課
主任上席文化財主事（本学卒業生）

④当日の流れ

16：30～16：45 ガイダンス及び縄文式土器についての講話

16：45～17：15 火起こし体験（アリーナ前）

17：15～17：45 勾玉作り体験

17：45～18：00 授業の振り返り

⑤受講生の感想

○大学生でも心の底から楽しむことができる体験だったので、特に小中学生には記憶に残るいい授業になると感じた。

○教育実習の精錬実習の際、縄文時代の暮らしについて行ったが、口頭だけの説明に終始してしまい生徒がイメージしにくいと感じた。やはり、実物の土器を見せたり、火起こしなどの体験学習を行ったりする方が、生徒の知識の定着に有効だと感じた。

○勾玉作りを行ってみて、同じ石でも種類によって色も全く違い個性が出るのがわかった。勾玉にどのように穴を開けたのかなど興味や疑問が広がった。

○初めて火起こし体験をしたが、なかなか火を付けられず苦勞した。改めてライターやガスのありがたさを感じることができた。

⑥成果と課題

受講生からは前向きな感想を得ることができ、好評だった。特に、教育実習を終えたばかりの受講生からは体験学習の有効性を体感したとの感想も寄せられており、教壇に立った際に役立つ経験となったものと考えている。

今後、「社会科・地歴科指導法」に取り入れる際の課題として、事前及び事後の指導を充実させる必要があることを感じた。

この点がしっかりなされないと「ただ体験してみても面白かった、楽しかった」ということのみに終始してしまう。

そこで、今後、このような活動を行う際の事前・事後指導の留意点をまとめてみた。

○学習者としての視点だけではなく、指導者としての視点をもたせたい。

例えば文化財課担当職員と教員の役割分担はどうあるべきか、体験に当たって生徒に指導すべき

注意事項は何かなど、指導者としての目線で体験活動に臨ませたい。学習者として受け身での体験活動に終始してしまつては、自らが授業を実施する際のスキルが向上しない。

○学習指導要領や教科書の記述内容との関連性を意識させたい。

学習指導要領や教科書での扱い、小学校での既習事項など指導者として当然把握しておくべき事項についてしっかり理解させたい。例えば、この体験をとおして生徒に身に付けさせるべき力は何か、教科書ではどのような扱われ方をしており、教材としてどう生かせるのかなどの視点をもたせたい。

(4)「社会科・地歴科指導法」での展開案

学校においては、博物館等を社会科見学旅行や修学旅行など多くの場面で利用している。しかし、事前指導がしっかりなされない場合、それを見学して終わりになつてしまい、博物館等のもつ本来の役割が果たされないことになってしまう。

そこで、受講生には、事前指導において、博物館等のもつ本来の役割を理解させるとともに、博物館等に常駐している専門職員（例えば文化財主事、学芸員など）の役割をしっかり理解させたい。

また、専門職員は教員が授業のねらいや目的を伝えることで、様々な対応をしてくれる。そのためには綿密な打ち合わせが必要であり、博物館等にすべてお任せするのではなく、授業の意義・目的をはっきりさせ、博物館等と学校が連携することで大きな効果が期待できるということを理解させたい。

○事前指導（90分）

①博物館等の役割と専門職員の役割について理解させる。

②訪問する博物館等の展示内容について資料等を使って調査する。

③訪問する博物館等の展示内容について学習指導要領や教科書での取扱い確認し、学習のどの場面で、どのように使うことができそうなのか調査しまとめる。その際、生徒の既習事項についても確認する。

④教科書で扱われている資料と類似の展示遺物がないかなど教科書との関連性を調査し、まとめる。



- ⑤教科書の学習内容を深めるために、専門職員にどのような説明を依頼することが有効か考え、まとめる（専門職員と連携の観点をしっかりもつ）。
- ⑥一場郁夫氏がその著書⁽⁷⁾の中で示している博物館の見方（6項目）・考え方（10項目）を指導する。

【博物館の見方】

- 1 展示室の概要をつかみ展示場所に行き、展示資料（モノ）をみる。
- 2 展示資料（モノ）の名前を知る。
- 3 展示資料（モノ）がつくられた時代を知る。
(時間意識)
- 4 展示資料（モノ）に関する解説を読む。
- 5 展示資料（モノ）をよく観察する。
- 6 近くに置いてある関係のありそうなモノを見る。
(因果意識・変遷意識)

【博物館の考え方】

- 1 何に使ったのか考える。
- 2 どのように使ったのか考える。
- 3 誰がつくったのかを考える。
- 4 何のためにつくったのかを考える。
- 5 人間のくらしに与えた影響と人間の知恵について考える。
- 6 今の時代からの時間経過を考える。
- 7 同じ時代の資料とのつながりを考える。
- 8 他の時代の資料への移り変わりを考える。
- 9 当時の人間のくらしの様子を想起する。
- 10 現在の人間のくらしと対比し、未来の人間の生き方について考える。

- ⑦教員としての視点から、博物館等の見学に当たって生徒に指導すべき注意事項をまとめる。最低限守るべき事項として以下の点は、受講生に徹底したい。

- 1 展示物には手を触れない。
- 2 館内で走ったり、大声を出したりしない。
- 3 展示室内の禁止事項を徹底させる。例えば、指定場所以外での写真撮影の禁止、飲食の禁止など

○展示遺物の見学及び専門職員の講話（180分）

- ①事前の調査に基づき展示遺物を見学する。
その際、単なる見学に留まることなく、実際の

授業場面を想定しながら「教材を探す」という視点で見学する。

- ②専門職員の講話を聞き、質疑を行う。

- ③ワークショップに参加する。

○事後指導（90分）

- ①学習プログラムの構想及び検討

国立歴史民俗博物館⁽⁵⁾では博物館活用の学習過程を以下の5つに類型化し、それぞれの学習の流れを示している。

- 1 博物館活用A型【課題発見型】（導入段階）
- 2 博物館活用B型【問題解決型】（展開段階）
- 3 博物館活用C型【調査活動型】（展開段階）
- 4 博物館活用D型【学習整理型】（まとめ段階）
- 5 博物館活用E型【発展学習型】（発展段階）

受講生に対する事後指導では、この5つの類型のうち、前述した学習指導要領の趣旨を踏まえるとともに実際の授業場面での活用の容易さなども考慮し、2の博物館活用B型【問題解決型】（展開段階）及び5の博物館活用E型【発展学習型】（発展段階）について焦点を当てて、学習プログラムの検討を行わせることとしたい。

2の学習は、学習課題→調査活動→博物館学習→まとめへと進める。これは、学校での授業において自分が設定した学習課題に沿って様々な資料を活用して調査・研究した後で、地域の歴史などもっと詳しく知りたいと思う学習内容についての調査活動を博物館において行うものである。基礎的な知識を得た上で自分の関心のある課題を追究できる学習過程であるため、児童の主体的な学習活動が期待できる。

5の学習は、学習課題→調査活動→まとめ→博物館学習へと進める。学習計画に基づく調査活動で得られたことを整理する中で、新たな課題やさらに深めたい内容について、博物館・資料館で学ぶことにより自ら主体的に学び続けるための力を培うことにつながる。

- ②構想した学習プログラムについて、受講生同士で発表し合う。

- ③ワークシートにより授業の振り返りを行う。

5. まとめとして

今回の論考では、教育振興財団が実施している「出土遺物公開事業」及び「遺跡見学会」を社会科・地歴科指導法でどのように有効活用できるかという視点で論述してきた。

教育振興財団は長年にわたり県内各地で文化財保護法に基づく調査を行い、貴重な遺跡や遺物を数多く発掘してきた。

身近な地域から出土される歴史的な遺物や遺跡は、郷土や国の歴史そのものであり、これらを保護し、教育的資産と活用していくことは日本人としてのアイデンティティの確立や異文化理解の促進にも資する重要なことであると考えている。

また、令和4年9月に策定された「千葉県総合計画～新しい千葉の時代を切り開く～」⁽⁸⁾では、「郷土と国を愛する心と世界を舞台に活躍する能力の育成」を重点的な施策・取組として掲げ、その推進について以下のように記載し、出土文化財に触れる体験学習の様子を写真入りで紹介している。

子どもたちが郷土や国の歴史、伝統文化、風土に対する関心や理解を深め、尊重する態度を身に付けるとともに、郷土や国を愛する心と誇りを持ち、自信を持って発信することができる力を育むための教育活動を充実します。

また、日本人としての自覚とアイデンティティの確立、異文化理解を重視した教育活動の推進を図るとともに、オンラインも活用した姉妹校交流や海外留学に関する支援、短期海外派遣等の事業を充実させ、社会のグローバル化に対応し、国際社会における日本の役割を意識しながら、世界で活躍することのできる人材の育成を目指します。

今日、学校教育の中で「郷土と国の歴史や伝統文化等について学ぶこと」、「多様な文化を認め合う国際社会の担い手の育成」は重要なワードとなっており、県としてここに着目していることは素晴らしいことと考えている。

最後に、本論考を進めるに当たって多くの示唆をいただいた酒々井町教育委員会の教育ファシリテーターである一場郁夫氏には大変感謝している。

同氏から「多くの教員が地域にある博物館や郷土資料館などを頻繁訪れ、そこに勤務する学芸員さんと人間関係を築くことが大切である。」とのお話があった。

本学で社会科・地歴指導法を学んだ学生が郷土の歴史に興味を持ち、博物館や郷土資料館などに足を運び、授業改善のヒントを掴み、引いては千葉県の児童生徒に郷土や国の歴史、伝統文化を尊重する心が育まれることを願っている。

注

- 1) 文化財保護法・1950年（昭和25年）5月30日法律214号・2022年（令和4年）6月17日法律第68号により改正 93条
- 2) 数値は文化庁ホームページを参照した。
- 3) 具体的な実施内容等については千葉県教育委員会文化財課ホームページを参照した。
- 4) 「中学校学習指導要領（平成20年告示）社会」文部科学省2008年（平成20年）3月28日 2 内容（1）歴史のとらえ方イ身近な地域の歴史を調べる活動では以下のように記載している。

イ 身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め、歴史の学び方を身に付けさせる。

引用・参考文献

- （1）「千葉県教育振興財団文化財センター年報No.47—令和3年度—」千葉県教育振興財団2022年（令和4年）8月17日 p4、p14～p28 教育振興財団の設立目的以下、主な事業、沿革、組織、実績などについて引用
- （2）「埋蔵文化財の保存と活用（報告）—地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政—」文化庁・埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究員会2007年（平成19年）2月1日 p2～p4
- （3）「中学校学習指導要領（平成29年告示）社会」文部科学省2017年（平成29年）3月31日
- （4）「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編」文部科学省2017年（平成29年）7月 p83、p86～p87、p92～p93
- （5）「れきはくをつかおう～博学連携のススメ～」国立歴史民俗博物館監修2004年（平成16年）8月18日 p2、3
- （6）「アクティブ・ラーニングを導入した博物館学習の実践的研究—主体的・対話的で深い学びを実現する博物館活用の方法」一場郁夫2018年（平成30年）2月10日 p4～p7
- （7）「歴史発見！歴博活用のアイデア」一場郁夫1999年（平成11年）7月5日 p38
- （8）「新しい千葉の時代を切り開く・CHIBA・千葉県総合計画」千葉県2022年（令和4年）9月 p249